
 卷頭言


 「剣術一遍にしては、
まことの道を得がたし」

次長 齋藤 常修

学習指導法の研究や授業研究が盛んである。

「楽しくわかる授業」を展開し、児童生徒に「確かな学力」をつけることは、教師の最大の責務である。また、このことは、“学歴社会”の反映(?)かどうかはともかくとして、「先生の指導力」に多くの関心を示す親、「教師の資質向上」を要請する社会の期待などにこたえることでもあろう。しかも、教師一人ひとりが実践的指導力を身につけ、伸ばすことは、「教師としての成長」に欠かすことのできない要件であるばかりでなく、授業の転換・充実をはじめとする学校教育の質的改善にも大きく寄与することになる。

しかし、指導法の研究や授業研究、指導力などの内実が、スイスの教育学者の日本の学校の授業に対するコメント——「教師は知識を教授することと、子どもの知力を点数化することには熱心だが…」——のようなものとしたら、多分に問題を含むことになるだろう。つまり、それは、「(知識を効率的に教授する上で)発問や板書がうまくいったかいか」など、授業の技術的次元のみで論議や研究が終始することになるからである。

教師の力量、資質能力を考えると、一つには、「指導力としての力量」、「専門的な能力」などと言われるものがある。教科等に関する専門的知識、教材開発力、指導技術などをその内容とする。これに対して、もう一つのもは、「教師としての力量」、「豊かな人間的資質」などと言われるもので、洞察力・判断力・包容力等を含み、更には、教育愛、豊かな教養、使命感などと言ったものがその内容とされるものである。

教師の力量、資質能力をこのようにとらえると、先に指摘した問題点は、わたしたちの考え方や研究などが、ともすると、「指導力としての力量」向上のほうにのみ目が向けられ、比重がかけられた結果もたらされた、といっても過言ではないように思われる。少なくともそのような実態・状況がこれまでにはあったと言えよう。

これからは、

- 豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成
- 個性を生かす教育の充実

などが社会・時代から強く求められ、教育の中心になる。しかも、本来、教育というものが教師の人間性や人格的要素がことさら強く影響し、また、それによって感化されることを考え併せるとき、わたしたちは、「教師としての力量」、「豊かな人間的資質」などを更に磨き高めることが非常に大切になってくると思うのである。
